

『タズキラ・イ・ホージャガン』 日本語訳注 (3)

澤 田 稔

富山大学人文学部紀要第 63 号抜刷

2015年8月

## 『タズキラ・イ・ホージャガーン』日本語訳注 (3)

澤 田 稔

### はじめに

本訳注は『富山大学人文学部紀要』第62号(2015年2月)掲載の「『タズキラ・イ・ホージャガーン』日本語訳注(2)」の続編であり、日本語訳する範囲は底本(D126写本)のp.53 / fol.27aの20行目からp.78 / fol.39bの10行目までである。前号の日本語訳注(2)の末尾から引き続き、カシュガル・ホージャ家イスハーク派のホージャ・ダーニヤールの長男ホージャ・ジャハーンについて語りはじめられる。そして、ホージャ・ダーニヤールの四男ハームーシュ・ホージャムのイラ(イリ)での逝去、五男で末子のホージャ・アブド・アッラーのアクスでの死去を間にはさみ、三男ユースフ・ホージャムのカルマク(ジュンガル王国)からの独立を目指す活動が詳しく描写される。その不穏な動きを察知してカルマクの王ダバチ(ダワチ)に通報したウチュ(ウシュ・トルファン)の有力者ホージャ・スィー・ベグも登場する。そして、ユースフ・ホージャムの独立運動の背景としてジュンガル王国のガルダンツェリンの死去(1745年)からダワチの即位(1752年)までの王位をめぐる内訌が簡潔に述べられている。

### 日本語訳注

語り伝えである(naqī dur kim)。ウラマーの精華<sup>1)</sup>で[p.54 / fol.27b]有徳者の純粹,ヤルカンドのムフティー(muftī),大アフン(āḥvun-i kalān<sup>2)</sup>),シャー・アブド・アルカーディル・バルヒー(Šāh ‘Abd al-Qādir Balḥī<sup>3)</sup>)は次のように言っている。あるバラートの夜(laylat al-

---

1) zubdat. D126; Or. 9660, fol. 29a は ZBTH, Or. 5338, fol. 28a は RTBH と記すが, ms. 3357, fol. 48a の ZBDH(T) に従う。

2) kalān は D126; Or. 5338, fol. 28a に記されていない。ms. 3357, fol. 48b; Or. 9660, fol. 29a; Or. 9662, fol. 37b により補う。

3) この人名のうち, D126 は Šāh を ŠA と, D126; Or. 5338, fol. 28a; Or. 9662, fol. 37b は Qādir を QADYR と綴るが, ms. 3357, fol. 48b; Or. 9660, fol. 29a の ŠAH, QADR により修正する。Balḥī の個所を, D126 は MRḤY, Or. 9662, fol. 37b は MZHY, Or. 5338, fol. 28a; Or. 9660, fol. 29a は MYRZA / MRZA と表記するが, ms. 3357, fol. 48b は MR を線で抹消して同一筆跡で BLḤY と書いている。ms. 3357 に従っておく。なお, A グループの写本の Turk d. 20, fol. 45b では MRJ(?)VḤ(?)Y, D191, fol. 53a では MRJY となっている。

barā'at)<sup>4)</sup>であった。夜半からいくらか<sup>5)</sup>経っていた。浄め(タハーラト)をあらたにして、感謝[の礼拝の]浄め(ウドゥー)のために[浄め(タハーラト)を]一度のかわりに二度<sup>6)</sup>行い、神に赦しを求め、深夜の礼拝<sup>7)</sup>にとりかかる前のことであった。まさにその時、私は気を失った。夢(wāqi'a)で次のように見ている。ふたつの天井が対称になっている大きく崇高な建物は、見ると目がくらむほどであり、その建物の円天井から光が現れ、太陽のように世界に輝きをもたらしていた。この建物に入るために百の嘆願('ajz vā nāzlar)により私は道を与えられた。私は入って隅にいて見ると、大きな台座(šah-šuffa)の上に[据えた]金製の王座(altundin bir taht)の上に一人の良い運[の人]<sup>8)</sup>が坐っており、その[人の]光には微量の日光もなかった。その前に、二人の王子(šahzāda)が坐っている。その一人は緑の衣装を、もう一人は赤の衣装を着ている。この偉人(buzurg)まわりに半分の<sup>9)</sup>[大きさの]王座が四つ置いてあり、四人の光り輝く男(mard-i nūrānī)が坐っている。彼らのまわりに列をなして大集団が坐っており、その数は神[のみ]が知る。私はこの状態を見て、我を失っている。また我に返り、ある人に、この王座の上にいるのは誰ですかと尋ねた。その人は次のように言った。すなわち、「その王座の上に乗っているのは、両世界のホージャ、ムハンマド・ムスタファー猓下<神が彼に祝福と平安を与えますように> [p. 55 / fol. 28a]である。この四つの半分の王座の上にいるのは、四人の友(yār)である。前にいる二人の若者(yigit)はイマーム・ハサンとイマーム・フサインである。[残りの]<sup>10)</sup>集団は教友たちである。ウンマの聖者たちである。今、クトブ(枢軸)[たる聖者]がこの世から旅立っている。その方の代わりにクトブの地位に人を任命するために[ムハンマド・ムスタファー猓下が]坐っている」と。

まさにこの状態の時であった。ホージャ・ジャハーン・ホージャム猓下をふたりの人が先導し、連れて入ってきた。ホージャ・ジャハーン猓下は地面にキスをしてへりくだり、挨拶した。かの猓下[預言者ムハンマド] <神が彼に祝福と平安を与えますように>は返事の挨拶をして「来い、子よ」と言い、その額にキスをして「子よ、そなたの能力は皆より上である。その高

4) シャーバーン月15日の夜。「罪の許しの夜」(ライラト・アルバラア)の祭日については、竹下政孝『イスラームを知る 四つの扉』東京：ねぶうま舎、2013年、130頁参照。

5) bir munča. D126; Or. 5338, fol. 28bはBR FARS, Or. 9660, fol. 29aはFŞL, Or. 9662, fol. 37bはPR/BYR ḤASと記すが、意味が通じない。ms. 3357, fol. 48bのBR MVNJHに従っておく。

6) du-gāna. D126ではgānaの文字が不鮮明であるので、ms. 3357, fol. 48b; Or. 5338, fol. 28b; Or. 9660, fol. 29aによる。

7) tahajjud. D126; Or. 9660, fol. 29aはTHJD, Or. 9662, fol. 38aはT'JDと綴るが、ms. 3357, fol. 48bのTHJDによる。

8) D126; Or. 5338, fol. 28b; Or. 9662, fol. 38aではbaht(運), Or. 9660, fol. 29aではkiši(人)となっている。

9) nīm. D126はNMと綴るが、Or. 5338, fol. 28b; Or. 9662, fol. 38aのNYMによる。

10) bāqī. D126ではbular(この者たち)と記すが、Or. 9662, fol. 38bのBAQYによる。

い位にそなたは相応しい」と言ってクトブの衣装を着させた。坐っていた人々がみな祝福した。〔預言者ムハンマドは〕「古い衣装をホージャ・ジャハーンの下僕に与えよ」と命じた。まさにその時、私〔シャー・アブド・アルカーディル〕は走って行っていた。〔ホージャ・ジャハーンは〕古い衣装を私に恵まれた。私は受け取り着た。ホージャ・ジャハーン・ホージャム猊下は「おお神の使徒よ、この地位は非常に偉大である。私めは無能力です」と申し上げた。使徒猊下く神が彼に祝福と平安をあたえますように>は、「おお子よ、それは神の贈り物である。我々は皆そなたにとって補助者である」と言った。

まさにこの時、私は我に返った。私は、自分がキブラの方に向かって神に赦しを求める文句 (istigfār) を唱えて坐っていることに、私の鼻が芳香で満たされていることに気づいた。即座に、私はこの良き知らせを〔ホージャ・ジャハーン・ホージャム猊下に〕<sup>11)</sup> 届けて祝福しよう [p. 56 / fol. 28b] と、宮廷 (オルダ) のほうへ走った。しかし、〔普段〕すべての門は閉じられ、鍵が内側に収められていた。しかしその夜、私は九つの門を開けて入った。その全ての鉄環がはずされていた。私は奇蹟によって門が開け放たれたのか、あるいは、その夜、事が生じて門を閉めないでいたのか分らなかった。いずれにしても、私は図書室の部屋の前に至った。蠟燭が燃えているのを見た。しかし門は閉じられおり、許可なしに入れないと、少し留まっていた。まさにその時、部屋の中から声が聞こえて来た。「入りなさい、アーフンよ」と。それで、私はその許可を得て部屋に入った。感謝の礼拝、浄め (ウドゥー) をして、祈願 (ドゥアー) の時であるらしく、祈願を終えて声を出したらしいのに気づいた。私は敬意を表して祝福した。ホージャムは「おおアーフンよ、なぜ祝福しているのか」と言った。私めは夢 (wāqī'a) [で見たこと] を説明した。しかし、古い衣装を私に与えたことを私は言わなかった。ホージャムは「そなた自身に与えた衣装をなぜ言わないでいる」と言った。私めは「ご主人さま (taqṣīr)<sup>12)</sup>」と言った。私は押し黙った。ホージャムは恩寵を示し、その肩に表地が錦の上着<sup>13)</sup> をかけていたようだが、〔その上着を〕脱ぎ、私に投げた。私は敬意を表し、取って着た。しかし以前にも私は真理 (神) に疑問をもっていた (Ilgāri ham walī bar-ḥaqq gumān qīlur erdim.)。今や、私の一つの信念が百となった。私は後悔と嘆願をして帰心<sup>14)</sup> した。私の心は燭光のように〔明るく〕開かれた。ホージャムは「この秘密を隠しておけ」と言った。私はホージャムが生きている間は、誰にも漏らさなかった。今、私は説明 [p. 57 / fol. 29a] している。〔こ

11) Or. 9660, fol. 30a による補足。

12) taqṣīr については本書 [p. 16 / fol. 8b] 「日本語訳注 (1)」76 頁の注 89 参照。

13) juba. D126 では判読しにくい。Or. 9660, fol. 30b の JBH, Or. 5338, fol. 30a; Or. 9662, fol. 39b の JVBA による。

14) inābat. D126; Or. 5338, fol. 30a; Or. 9662, fol. 39b は AYNABT と綴るが、Or. 9660, fol. 30b の ANABT による。

のように] シャー・アブド・アルカーディルは物語っていた。

さて、ホージャ・ジャハーン・ホージャム猯下にスイッディーク・ホージャム (Şiddiq Hōjam) という最愛の子があった。美貌において太陽に勝っていた。気立ての良さにおいてムハンマド風の気質が彼から現れていた。洞察力においてプラトン、アリストテレスは最も少ない〔彼の〕弟子であった。そして寛容さにおいて最後の下僕、召使であった。公正さにおいてアヌーシールワーンは従僕<sup>15)</sup>であった。難しい言葉が出てくるたびに、これはスイッディークの専門であると、〔スイッディーク・ホージャムは〕天井<sup>16)</sup>を凝視していた。まさにその時、その言葉は把握<sup>17)</sup>されていた。年齢は十八であった。その勉学は信条を唱えること (‘aqāyid hān) であった。詩の理解において、他の門弟たち (yārānlar) が対句を暗記する前に、この方は内容を把握して暗唱していたほどであった。門弟たちは皆、そのようなすばやい天性と鋭い理解力を賞賛していた。当時のウラマーたちの同意により、ホージャ・ジャハーン・ホージャム猯下の許可により本を著した。その名はフトゥーヒー (Futūhī) という。その本の内容<sup>18)</sup>はすべての学識ある者たちに知られている。

語り伝えである (naqlī dur kim)。ホージャ・ジャハーン・ホージャム猯下は数日、悲しみにとらわれ、苦悩のために誰にもお会いにならなかった。家族なども寄せ付けなかった (yol bermādilar)。【p. 58 / fol. 29b】誰も何事が起ったのかわからなかった。結局のところ、ある日、命じられて、家族が集まった。それで皆は集まった。〔ホージャ・ジャハーン・〕ホージャム猯下はその祝福された眼から涙を一滴一滴、春の雲のごとく流しはじめた。泣く理由を尋ねる勇氣は誰にもなかった。一時して、〔ホージャム猯下〕ご自身が宝石のような言葉で次のように説明した。すなわち、「そなたたちは皆、次のことを知って賢明となれ。すなわち、東の方から、ある集団が出てきて、これらの城市を戦闘により占拠<sup>19)</sup>して我々の属人たち (tābi‘lār) を・・・<sup>20)</sup> 虐げる (hār qīlur)。その時、勝利はあちら側にある。不幸<sup>21)</sup>が我々の側になる。多

15) hādīm. D126; Or. 5338, fol. 30a; Or. 9660, fol. 31a; Or. 9662, fol. 39b は HADYIM と綴る。

16) saqf. D126; Or. 5338, fol. 30a では ŞFQ. Or. 9660, fol. 31a の SQF による。

17) taşarruf. D126; Or. 9660, fol. 31a は TŞRVF と綴るが、Or. 5338, fol. 30a; Or. 9662, fol. 40a の TŞRF による。

18) mađmūn. D126 は MZMVN と綴るが、Or. 5338, fol. 30b; Or. 9660, fol. 31a; Or. 9662, fol. 40b の MĐMVN による。

19) taşarruf. D126; Or. 9662, fol. 40b は TŞRVF と綴るが、Or. 5338, fol. 30b; Or. 9660, fol. 31b の TŞRF による。

20) BY ḤARH’ (bī-ḥāra-i?) の意味を解し得ない。

21) nuḥūsāt. D126 は NḤVSAT と綴るが、Or. 9660, fol. 31b の NḤVSAT による。

くの流血事とともに父を息子に、母を娘に会わせることなく、殉教のきざはしに至らしめる。もし我々の側からダスターンの〔子〕ルスタム (Rustam-i Dastān)<sup>22)</sup>が戦場に入っても、〔我々は〕蚊<sup>23)</sup>のように弱くなる。我々の子孫から誰も残らない。おお、子たちよ。我々自身の苦難を我々自身が引き受けよう、我々自身の状況に泣こう。その時に我々に対し泣いて苦難・不幸を引き受ける人はいない。

詩

心よ、準備せよ、魂に災難が来るはずだ  
百の困難な事が、どんなにも強烈な圧迫が来るはずだ  
どんな人がお前の状況に泣き、どのようにお前の不幸を引き受けるのか  
お前の不幸を引く受けよ、泣け。いっばいの竜がくるはずだ

そして我々は、偉大なる先祖、イマーム・ハサン猊下、イマーム・フサイン〔猊下〕＜神が兩人を嘉せられますように＞の慣行(スンナ)を実行するであろう。そのみならず、カルバラーの荒野 (dašt-i Karbalā) における彼らに **[p. 59 / fol. 30a]** ふりかかった艱難辛苦よりも百倍以上のこの災難に満ちた荒野が我々の前に現れるだろう。天や地は我々の状況に泣くだろう。そして空の天使たちは我々に哀悼するだろう。我々を友とする者たちに、そのように心配や不幸が現れるだろう。そして街路や路地で石・煉瓦のように人々の骸骨が横たわるだろう。それを埋葬するのに人はいないだろう。至高の神の命令により東<sup>24)</sup>方から異教徒の軍隊<sup>25)</sup>が現れ、彼ら<sup>26)</sup>を破り、我々の血を求めるであろう<sup>27)</sup>。彼らは我々にしたことを百倍以上後悔し、百千の悔悟とともに山から山へ荒野から荒野へ逃れて、彼ら自身も殉教のきざはしを見いだすだろう。

それから、ホージャ・ジャハーン・ホージャム猊下は帳面から一枚の紙葉を取ってスイツディーク・ホージャムに与え、「おお、子よ、残っている〔詩の〕内容がそこに表現されるま

---

22) 『シャー・ナーマ』に登場するイランの伝説的英雄。D126はRVSTM DASTAN, Or. 5338, fol. 31a; Or. 9660, fol. 31b; Or. 9662, fol. 40bはRSTM DASTANと綴る。

23) paša. D126はFŠH, Or. 5338, fol. 31a; Or. 9662, fol. 41aはFYŠH, Or. 9660, fol. 31bはPYŠHと綴る。

24) mašriq. D126; Or. 5338, fol. 31b; Or. 9662, fol. 41bはMŠRYQと綴るが、Or. 9660, fol. 32aのMŠRQに従う。

25) 清朝の軍隊を指していると思われる。

26) アーフアーク派およびその与党を指していると思われる。

27) Or. 9660, fol. 32aでは「我々の恨みを彼らに晴らすだろう (bizniñ intiqāmimiznī olardın ʔalab qilǵaylar)」、Or. 9662, fol. 41bでは「我々の恨みを晴らすだろう (bizniñ intiqāmimiznī ʔalab qilǵaylar)」と述べる。

で読むように」〔と言った〕。スイッディーク・ホージャム猯下はその紙葉を開いて読んだ。子息たち (ahl-i awlād), 弟子・信奉者 (murīd muḥliṣ) は自分たちに<sup>28)</sup> 起きている出来事を聞き、泣き叫んで悲嘆にくれ、互いに抱き合い、嘆きうめいて、〈判決は神に属する〉〔という言葉を〕絶えず唱えた。

詩

暴君の車輪は最後の仕事を始めた、おお、心よ  
我々の胸を一部分のごとく傷つけて、おお、心よ  
今うんざりすることは生涯よりも先決<sup>29)</sup> だ、おお、心よ  
何故ならば、我々を悲しみに巻き込んだ、おお、心よ  
**[p. 60 / fol. 30b]** 今、事が多く我々の上に降りかかる、おお、心よ  
〔そなたが、どんなに熱く嘆息を躡わにしても、おお、心よ〕<sup>30)</sup>  
どのように今、悲哀を語り合うことに同情すべきか、おお、心よ  
機知の分かる誰に、我々は嘆くべきなのか、おお、心よ

痛みのある人々のなかで、悲嘆が私に割り当てられた  
・ ・ ・<sup>31)</sup> 鳥のなかで、夜鳴鶯が割り当てられる限り  
偶然ではない故に、医師はこの痛みを知らない  
喜んで手をたたき、・ ・ ・<sup>32)</sup> して  
間もなく私は、我が宿命がそうであることを知った  
何故ならば、この辛苦のあいだで私は青白くなり動揺した  
そなた自身を投げ出して、自分自身について知れ、おお、心よ

私は何人かの学識ある人々に親交があった  
目をつぶって開けるまで、我が当惑は消え去る直前まで増える

---

28) özlārigā. D126 は AVZRLARYKA と誤記する。Or. 5338, fol. 31b; Or. 9660, fol. 32a; Or. 9662, fol. 41b の AVZLARYKA に従う。

29) awalā. D126 は AVLAD と誤記する。Or. 5338, fol. 31b; Or. 9660, fol. 32a; Or. 9662, fol. 42a の AVLA に従う。

30) この 1 行の詩は D126 と Or. 5338, fol. 31b には欠けており、Or. 9660, fol. 32b; Or. 9662, fol. 42a により補う。

31) YVNAN の読みと意味を解し得ない。

32) D126 では JVNAYŠLAR, Or. 5338, fol. 32a; Or. 9660, fol. 32b; Or. 9662, fol. 42a では JVNALYŠLAR と綴られているが、読みと意味を解し得ない。

百の後悔をして、今や、我が悲哀を味わうだろう  
時に別離が時に苦悩が私を苦しめる  
物憂げに、この郷愁のなかで我が不幸を聞くやいなや  
世の中に留まる力は私にあまり残っていない  
今、そなたは秘密の持ち主をどのように追い求め見つけるべきか、[おお、]<sup>33)</sup> 心よ

我らの魂は最後の日に死期の網にかかるだろう  
我々の対策は無力のままに哀れにしておかないだろう

**[p. 61 / fol. 31a]** 我々の可能性が残らないだろうことを我々の正義<sup>34)</sup>に聞かせる  
我々の信仰は我々の上に日よけとなり<sup>35)</sup> 続けるだろう  
我々の流す血は地上をチューリップ園にするだろう  
すべての友と信者は我々の悲しみを多く味わうだろう  
幾人かの血に飢えた者は、我々の血を飲むことに [なろう]、おお、心よ

この五行詩<sup>36)</sup>を〔読み〕終えた後、この一団から「悲しいかな。悲惨だ」という声が天空に達した。それから、クルアーンの朗読、祈願、タクビールをおこなった。その後、ホージャ・ジャハーン・ホージャム猊下は皆の者に、心を慰めるために次のように言った。「この知らせからそなたたちへの吉報は次のとおり。殉教のきざしは最高である。殉教者たちは全くその地位において預言者たちよりも低いけれども、いくらかの事においては凌駕している。〔次の『クルアーン』の〕節が下されている。＜神の道に倒れた人々<sup>37)</sup>を、「死者」と言うな。いな、彼らは生きている。ただ、おまえたちは気がつかないだけである＞〔『クルアーン』2-154〕。すなわち、称賛されるべき至高なる神は、「人々よ、至高なる神の道において死んでいる者は殉教者である。その者を死者と言うな」〔と〕言った。

33) äy. D126 に欠けているので、Or. 5338, fol. 32a; Or. 9660, fol. 32b; Or. 9662, fol. 42b により補う。

34) D126 では DADA (dada, 父) と記すが、Or. 5338, fol. 32a; Or. 9660, fol. 32b; Or. 9662, fol. 42b の DAD (dād) に従う。

35) D126 は BVLVT と誤記するが、Or. 5338, fol. 32a; Or. 9660, fol. 32b の BVLVB, Or. 9662, fol. 42b の BLVB によりと bolup と読む。

36) muḥammad. Or. 9660, fol. 32b; Cf. Or. 9662, fol. 42b では muṣamman (8 脚からなる韻律の詩句) と記す。

37) 井筒俊彦氏は、「聖戦」すなわち異教徒との戦いにおいて戦死した人々、と注記している (井筒俊彦 (訳) 『コーラン (上)』東京: 岩波書店, 1964 年, 39 頁)。

シャイフ・ハサン<sup>38)</sup>・バスリー猯下 (Ḥaḍrat-i Šayḥ Ḥasan Baṣrī)<sup>39)</sup>から次のように伝承 (riwāyat) されている。確かに<sup>40)</sup> 殉教者は生きている。それで、彼らには安らぎと喜びがある。殉教者の靈魂は緑の鳥の姿である。トゥーバーの樹<sup>41)</sup>の枝の上において、天国の恵みにより望む土地へ飛んでいく。この性質はほかの靈魂には存在しないのである。

ハディース

**[p. 62 / fol. 31b]** < 預言者——彼の上に平安がありますように——は言った。復活の日に使徒たち、それから知識人たち、それから殉教者たちが仲裁する<sup>42)</sup>。さらに、流産した胎児は天国の門に居続ける。そして彼に、入れと言われる。そして、入るなど言う。さらに、私とともに諸門<sup>43)</sup>に入る<sup>44)</sup> >。

すなわち、使徒猯下<彼の上に平安がありますように>は次のように言っている。預言者たちと聖者たち、それから、知識人たち、それから殉教者たちが仲裁する。さらに夫人 (ハトゥン) たちの妊娠から落ちた肉片にも、至高の神は生命を授与する。天国の門において守られている。天国に入りなさいと言う。彼らは、「我々の父母が入らないかぎり、我々は入りません」と言う。さらに、殉教者そのものは清らかである。そしてまた、[殉教者には]ある者を仲裁する力がある。一滴の血はそれほど種々の<sup>45)</sup> 罪深い者たちに対する償いである。

殉教者についての〔クルアーンの〕節、ハディースは多くある。〔ホージャ・ジャハーン・〕ホージャム猯下は、「[それらの節やハディースについて] 我々が説明するならば、言葉は長く

38) D126 と Or. 5338, fol. 32b はシャイフ・バスリーと記すが、Or. 9660, fol. 33a によりハサンを補う。

39) ハサン・バスリーはウマイヤ朝期バスラにいた高名な禁欲主義的思想家 (642?-728 年)。彼からのものとして伝えられるハディースも数多いという。詳しくは、藤井守男「ハサン・バスリー」大塚和夫ほか編『岩波イスラーム辞典』東京：岩波書店、2002 年、753-754 頁、ファイード・ウッディーン・ムハンマド・アッタール (著)、藤井守男 (訳)『イスラーム神秘主義聖者列伝』東京：図書刊行会、1998 年、23-47 頁、竹下政孝『イスラームを知る 四つの扉』192-205 頁参照。

40) 原文では taḥqīq と記されているが、taḥqīqan の意味であると思われる。

41) 天国にある樹の名。その枝は 4 万 5 千本もあり、天国のあらゆる場所に陰を与えており、その果実はこの世のどんな果実とも比べられないくらい美味であるという。詳しくは、竹下政孝『イスラームを知る 四つの扉』69 頁参照。

42) この一文はイブン・マージャのハディース集『スナン』に載る「神の使徒——神が彼に祝福と平安をあたえますように——は言った。復活の日に三者、[すなわち] 使徒たち、それから知識人たち、それから殉教者たちが仲裁する」によるものであろう。SUNNAH.COM (<http://sunnah.com/ibnmajah/37>), 2014 年 7 月 24 日閲覧。

43) D126 は ABWAY と綴るが、Or. 9660, fol. 33a; Or. 9662, fol. 43a の ABWAB (abwāb) に従う。

44) 「そして彼に」から「諸門に入る」までの文章の読解にはさらなる検討の余地がある。

45) 「種々の」(türlük) は Or. 9660, fol. 33b; Or. 9662, fol. 43b による補足である。

なってしまう」と言い、殉教のきざはしを説明して心を慰めた。「たとえ今日、我々の順番であるとしても、明日は彼らの順番となる。この世は信心深い者たちの牢獄、不信心者たちの庭園である。特に使徒の子孫に、この世は決して忠実ではなかった。もし両世界の王子たち<sup>46)</sup>を見て知っているならば、ヤズィード<sup>47)</sup>はどんな迫害をしたか。ほかの者たちに順番が残るだろう」と言い、説論を終えた。要するに、この有様を、この会合について幾人かが年代表示銘として記した (ta'riḡ pitidilār)。8年目に<sup>48)</sup> 現実に起きた<sup>49)</sup>。

さて、ユースフ・ホージャム・パーディシャー猊下 (Ḥaḍrat-i Yūsuf Ḥōjam Pādišāh)<sup>50)</sup> の描写 [p. 63 / fol. 32a] 記述は長い。神が望むならば、私は〔のちに〕詳しく作文する。

さて、ハームーシュ・ホージャム (Ḥāmūš Ḥōjam)<sup>51)</sup> は礼拝に完璧であり、日中は断食し、夜は起きていて、決して外面も内面も聖法に反する事は生じなかった。クルアーンの朗読で時を過ごしていた。その気高い本名 (ism) はホージャ・ニザーム・アッディーン (Ḥōja Niẓām al-Dīn) であった。沈黙を守るという現象ゆえに、ハームーシュ<sup>52)</sup> という異名 (ラカブ) がたてまつられた。マウラーナー [ルトフ・アッラー] 猊下<sup>53)</sup> から多くの教導、援助がハームーシュ・ホージャムに関してあった。ハームーシュ・ホージャムの内面は力に満ちていた。この方に心の怒り<sup>54)</sup> をもたらす者は誰でも、確かに災難 (ḥawādis) を免れないでいた。アクス城

46) šahzāda-i kaunainlar. D126 と Or. 5338, fol. 33a は šahzāda-i kaunain と記すが、Or. 9660, fol. 33b に従う。A グループの写本の Turk d. 20, fol. 59a; D191, fol. 67b; ms. 3357, fol. 75a によると、イマーム・ハサンとイマーム・フサインのことである。

47) ウマイヤ朝第2代のカリフで、680年アリーの子フサインをカルバラで殺害した。シーア派にとってヤズィードは憎んで余りある仇敵である。羽田正「ヤズィード」大塚和夫ほか編『岩波イスラーム辞典』1015頁参照。

48) A グループの写本の Turk d. 20, fol. 59b; D191, fol. 68a; ms. 3357, fol. 75b では「七年目または八年目に」となっている。

49) fīmā fih wuqū'ga keldi. D126 は wuqū'a keldi と記すが、Or. 5338, fol. 33a; Or. 9660, fol. 33b; Or. 9662, fol. 43b に従う。なお、fīmā fih の意味を十分に解し得ない。

50) ホージャ・ダーニヤールの三番目の息子である (本書 [p. 51 / fol. 26a] 「日本語訳注 (2)」116頁)。

51) ホージャ・ダーニヤールの四番目の息子である (本書 [p. 51 / fol. 26a] 「日本語訳注 (2)」116頁)。

52) ḥāmūš には「黙っている」「静かな」などの意味がある。

53) D126; Or. 5338, fol. 33b; Or. 9662, fol. 44a では Ḥaḍrat-i Mawlānā とのみ記すが、Or. 9660, fol. 33b は Ḥaḍrat-i Mawlānā Luṭf Allāh とする。後者により補足する。

54) kāhiš-i ḥāṭir. D126; Or. 5338, fol. 33b; Or. 9660, fol. 34a; Or. 9662, fol. 44a は KAHŠ ではなく、KAHYŠ (kāhiš) と綴る。ペルシア語の kāhiš は「減少、削減」という意味であるが、ヤーリング氏の東トルコ語方言辞典では、kahiš に indignation の意味を与えている (Gunnar Jarring, *An Eastern Turki-English Dialect Dictionary*, Lund, 1964, p. 163)。

市 (Aqsū šahri) の統治の王座 (taht-i saltanat) はこの方に確立していた。その司法と審判 (dād vä soragları) を聖法 (シャリーア) の命令で治め、公平を期していた。ミールザー・ハディー・ベグ (Mīrzā Hadī Beg)<sup>55)</sup> の乳姉妹 (hamšira) がいた。ウルグ・アイラム (Uluğ Aylām<sup>56)</sup>) と名付けていた。とても清純な性格の人であった。〔ハームーシュ・ホージャムは〕この方を婚姻に受け入れていた。しかし、産まないでいた。まったく子がなかった。

ハームーシュ・ホージャム猥下は暫く後、イラに行った。暫くイラにいて、病気になった。だんだんと病状が厳しくなった。死の病であることが分かった。ユースフ・ホージャム・パーディシャー猥下もイラにいた。人を遣らせてユースフ・ホージャムを来させ、次のように遺言をした。「おお、同胞のわが兄弟よ。私は今、**[p. 64 / fol. 32b]** 祝福された旅となっている。この旅の道中の糧食は敬虔な行為である。次のような使徒のハディースがある。すなわち、あらゆる人は死ねば断絶する。しかし、その人の三つの行いは断絶しない。第一に、現行の喜捨 (šadaqa-i jāriyya)。貯水池 (köl), 礼拝所 (マスジド), 学院 (マドラサ) のようなもの。〔第二に〕知識を学ぶこと。第三に敬虔な子の祈願。その三つの事のどれも私には可能にならない。心ならずも私は去り行く。そなたたちは、我が〔礼拝用の〕絨毯にあるものは何でも神の道において神のために貧民たちに費やすように。そして、その残ったものを取り、ヤルカンドにおいて<sup>57)</sup> 学院を建てさせるように」。さらに次のような遺言。「我が同胞 (兄弟), ホージャ・ジャハーン・パーディシャーヒム (Pādišāhim) は私に対して父の教導よりも多くの教導をしていた。私は彼の恩恵を多くこうむっていた。私において彼の権利 (ḥuqūqları) は私の体にある毛よりも多い。私は一つも履行できなかった。〔しかしながら彼が〕私に満足してくれますように」と遺言を終え、生命を神に引き渡した。<「我々は神のもの。我々は神のみもとに帰る」と言われている> [『クルアーン』 2-156]。嘆き叫ぶ声<sup>58)</sup> があがった。

そして、いくつかの党派 (firqa) のムスリムがイラにいた。ティムール・ハーン (Timūr

55) 本書 **[p. 4 / fol. 2b]** 「日本語訳注 (1)」63 頁の序文で称賛されている人物である。ハディーは 1760 年にヤルカンドのハーキム・ベグに任ぜられ、その官職のまま 1778 年に病没している (澤田稔『『タズキラ・イ・ホージャガン』研究についての覚書』『帝塚山学院短期大学研究年報』第 39 号, 1991 年, 11 頁)。

56) AYLAM と綴られている。スールマノヴァ氏の読み (Aylam) に従う (Aytyan Nurmanova, *Qazaqstan Tarikhī Turalī Türki Derektemeleri IV tom. Mūkhammed-Sadiq Qashghari, Tazkira-yi 'azizan*, Almatī: Dayk-Press, 2006, p. 132)。ayla には elder sister, old woman の意味があり、それに一人称所有接尾辞の m が付けられたものであろう (Gunnar Jarring, *An Eastern Turki-English Dialect Dictionary*, p. 16 参照)。

57) D126; Or. 5338, fol. 34a; Or. 9660, fol. 34b は YARKNDH と綴るが、Or. 9662, fol. 44b の綴り (YARKNDDH) により Yārkandda と読む。

58) ġarīv vä firyād. D126 は ĠRV と綴るが、Or. 5338, fol. 34b; Or. 9660, fol. 34b の綴り (ĠRYV) により ġarīv と読む。

Hān), エルケ・ハーン (Ārkā Hān)<sup>59)</sup>をはじめ数人のハーン家の子孫 (hān awlādī), ユースフ・ホージャム, ホージャ・ムーミン・ホージャムをはじめ「数人の王子たち, 数人の」<sup>60)</sup> 城市からきたベグたちが行き, 千人が「葬儀の」礼拝に参列した。ティムール・ハーンが礼拝をおこなった。イラの境界「内」にいる貧民たちに喜捨 (ṣadaqa) を施し, 皆は富裕になった。さらに, 何よりも「別に」<sup>61)</sup> 七百の綿布<sup>62)</sup> を与えた。祝福された遺体を駱駝に箱で乗せ, ユースフ・ホージャム・[p. 65 / fol. 33a] パーディシャーにホージャ・アブド・アッラー・ホージャムという勇敢な息子がいたが, 「彼が」駱駝の・・・<sup>63)</sup> を引き, アクスへ連れて行った。アクスの人びとはみな出迎え, 敬意を表してシャフパーズ・ホージャム猓下 (Ḥaḍrat-i Šahbāz Ḥōjam) のマザール (mazārat)<sup>64)</sup> に預けて (amānatan) 「一時的に」埋葬した。供宴で香りをたて<sup>65)</sup>, ホージャ・アブド・アッラー・ホージャムはイラに戻った。

そして暫く後に機会をみつけて, 彼の祝福された骨を「アクスから」移して, ヤルカンドにおいてアルトゥン内に埋葬した。ホージャ・ジャハーン・ホージャム猓下はハームーシュ・ホー

59) エルケはヤルカンド・ハーン家の成員アブド・アッラシード・ハーンの子で, ティムールはエルケの息子である。本書 [p. 47 / fol. 24a] 「日本語訳注 (2)」111 頁の注 137 参照。

60) Or. 9660, fol. 34b により *nečä šahzādalar nečä tan* を補う。

61) Or. 5338, fol. 34b; Or. 9660, fol. 34b; Or. 9662, fol. 45a により *böläk* を補う。

62) *šaṅ ḥami*. 現代ウイグル語で *ḥam* は「地織り木綿, 手織り木綿」である (飯沼英二『ウイグル語辞典』東京: 穂高書店, 1992 年, 93 頁, 新疆大学中国語系 (編)『維漢詞典』烏魯木齊: 新疆人民出版社, 1982 年, 122 頁)。ムッラー・ムサーによると, *šaṅ* の意味は *böz ḥam* (粗い木綿) であるらしく, 漢人 (Ḥaṭāy) は *ḥam* を *šaṅ* と呼ぶという (*Taariḫ-i Emenie. Istoriya vladetelei Kašhgarii, Sochinenie Mulli Musy, ben Mulla Aisa Saiamtsa, Izdannaya N. N. Pantusovym, Kazan, 1905, p. 55*)。V. V. Bartol'd, “Retseziya na knigu: Taariḫ-i Emenie. Istoriya vladetelei Kašhgarii (1905),” *Sochineniya*, Tom 8, Moskva: Nauka, 1973, pp. 216, 218, 佐口透『18 - 19 世紀東トルキスタン社会史研究』東京: 吉川弘文館, 1963 年, 112 頁, 堀直「清代回疆の貨幣制度——普爾鑄造制について——」『中嶋敏先生古稀記念論集 (上巻)』東京: 汲古書店, 1980 年, 583 頁も参照。

63) D126; Or. 9660, fol. 35a では *BVYDASYNY*, Or. 9662, fol. 45a では *BVYDHSYNY*, Or. 5338, fol. 34b では *BVRHSYNY* と綴られている。SYNY は *sini* / *sini* (三人称所有格接尾辞と対格語尾) であろう。BVYDA, BVYDH, BVRH の読みと意味を解し得ない。なお, A グループ写本の Turk d. 20, fol. 62a; D191, fol. 71a; ms. 3357, fol. 80a では「手綱を (*‘inānīni*)」となっている。

64) A グループ写本の D191, fol. 71a; ms. 3357, fol. 80a は「イーシャーン猓下ホージャ・イスハーク・ワリー<彼の秘奥が神聖になりますように>のマザール (*mazārat*) に預けて (*amānatan*) 埋葬した」と記す。しかし, 同グループの別の写本 Turk d. 20, fol. 62a-b では「イーシャーン猓下ホージャ・イスハーク・ワリー<彼の秘奥が神聖になりますように>の息子, ホージャ・シャフパーズ猓下<彼の秘奥が神聖になりますように>のマザール (*mazārat*) に預けて (*amānatan*) 埋葬した」と記し, B グループである本書の記述と矛盾しない。

65) *uluḡ aš yed būy qīlīp*. *yed* の箇所を D126 は *AYD* と綴るが, Or. 5338, fol. 34b; Or. 9660, fol. 35a; Or. 9662, fol. 45a の綴り (*YD*) による。なお, *yed* の読みと意味 (*a perfume, a pleasant smell*) は Robert Barkley Shaw, *A Sketch of the Turki Language as Spoken in Eastern Turkistan (Kašghar and Yarkand)*, Part 2: Vocabulary, Turki-English, Calcutta, 1880, p. 199 によった。

ジャムの遺言を実行し、アルトゥンにあるアク・マドラサ (Aq Madrasa) を建て、寄進財 (waqf awqāf) を非常に増やして、その功德利益を<sup>66)</sup> ハームーシュ・ホージャの名に宛てた。

〔物語の章。聞かなければならない〕<sup>67)</sup>。

ホージャ・アブド・アッラー・ホージャムはこの導師 (‘azīz) たちの末弟 (kičik ini) であった<sup>68)</sup>。非常に勇敢で<sup>69)</sup> 大志があり、寛容の持ち主であり、羞恥心があり、敬虔で公正な人であった。エルケ・ハーンの乳姉妹 (hamšira) と結婚していた。この王女 (malika) から四人の息子がいた。長子はホージャ・シャムス・アッディーン・ホージャム (Ḥōja Šams al-Dīn<sup>70)</sup> Ḥōjam), 二番目はホージャ・ヤフヤー・ホージャム (Ḥōja Yaḥyā Ḥōjam), 三番目はアフマド・ホージャム (Aḥmad Ḥōjam), 四番目はアービド・ホージャム (‘Ābid Ḥōjam)。この王子 (šahzāda) たちの描写は、各自の所でなされる。

ホージャ・アブド・アッラー・ホージャムにホタン<sup>71)</sup> 城市が割り当てられていた。自分の代わりにシャムス・アッディーン・ホージャムを〔ホタンに〕置き、自らはアクスにおいてハームーシュ・ホージャムのもとに滞在していた。暫くしてのち、**[p. 66 / fol. 33b]** 天命が下り<sup>72)</sup>、<その期限が来れば、一刻たりとも、遅らせることも進めることもできない> [『クルアーン』7-34] という命令により死期のシャーベットを飲んだ。<「我々は神のもの。我々は神のみもとに帰る」と言われている> [『クルアーン』2-156]。人々は老いも若きも (uluḡ ušaq) 集まり、経帷子を着せて整え、祝福された遺体を持って行き、アルトゥンの中に埋葬した。幾人かの人々は、ホージャ・アブド・アッラー・ホージャムにアクスのハーキムであるアブド・アルワッハー

66) sawāb gamarātini. 後者の語を D126 は ŠMRADNY と綴るが, Or. 5338, fol. 35a; Or. 9660, fol. 35a の綴り (ŠMRATYNY) による。

67) fašl-i dāstān ištīmāk kerāk. Or. 9660, fol. 35a による補足。

68) 彼を含め、ホージャ・ダーニヤールの5人の息子の名前は、本書 **[p. 51 / fol. 26a]** 「日本語訳注 (2)」116頁に挙げられている。

69) D126 は ḤRMT LYK と綴るが, Or. 9660, fol. 35a; Cf. Or. 5338, fol. 35a; Cf. Or. 9662, fol. 45a により, jur’atlik と読む。

70) D126 は Šams Dīn とするが, Or. 5338, fol. 35a; Or. 9660, fol. 35a による。

71) D126; Or. 9660, fol. 35a; Or. 9662, fol. 45b は ḤVTN (Ḥōtan) と綴るが, Or. 5338, fol. 35a の ḤTN (Ḥotan) による。

72) D126; Or. 5338, fol. 35a では qaḏā-yi wāqi‘a bolup. Or. 9660, fol. 35a では qaḏā-yi āsmānī wāqi‘ bolup. Or. 9662, fol. 45b では qaḏā-yi āsmānī bolup.

ブ・ベグ (‘Abd al-Wahhāb Beg)<sup>73)</sup> が毒を盛ったらしいという話を広めた。この疑惑を尊師たちは信じなかった。[尊師たちは]「たとえ幾らか正しいとしても、彼らは最後の審判に〔その正否を〕委ねた。つまり、報酬を翌日、最後の審判の日、至高なる神が比べるであろう<sup>74)</sup>」と言った。

さてこの頃、ヤルカンド〔において〕アワズ・ベグ (‘Awaḏ<sup>75)</sup> Beg)<sup>76)</sup> が〔亡くなり〕、ホタンからガーズイー・ベグ (Ġāzī Beg) を〔連れてきて〕ハーキムにしていた。ホタンに対してガーズイー・ベグの息子のウマル・ベグ (‘Umar Beg) がハーキムであった。アクスに対してアブド・アルワッハーブ・ベグ、ウチュ (Uč) に対してホージャ・スィー・ベグ (Hōja Sī Beg)<sup>77)</sup> が、カシユ

---

73) 清朝史料に見える「阿布都噶布伯克」または「阿布都伯克」であり、後述のホージャ・スィー・ベグの長兄に当たる（佐口透『18-19世紀東トルキスタン社会史研究』60頁）。アブド・アルワッハーブ・ベグがホージャ・スィー（スィール）・ベグの兄弟であることは、『ターリーヒ・ラシーディー』テュルク語訳附編にも明記されている（ジャリロフ・アマンベク、河原弥生、澤田稔、新免康、堀直『『ターリーヒ・ラシーディー』テュルク語訳附編の研究』NIHUプログラム「イスラーム地域研究」東京大学拠点、2008年、166頁および注368参照）

74) D126はTNKLŠAY, Or. 9660, fol. 35aはTNKLŠYKAYと綴るが、Or. 5338, fol. 35bのTNKLŠKAYによりtänläškäyと読む。

75) D126; Or. 9660, fol. 35bは‘VZ, Or. 9662, fol. 45aはHVDと綴るが、Or. 5338, fol. 35bの‘VDにより‘Awaḏと読む。

76) 1727年にジューンガル国王のツェワンラブタンが急死し、息子のガルダンツェリンが跡を継いだ時に、アワズ・ベグなる者がヤルカンドのハーキムになっている（ジャリロフ・アマンベクほか『『ターリーヒ・ラシーディー』テュルク語訳附編の研究』162頁および注340参照）。

77) 清朝史料に見える「霍集斯伯克」に当たり、その父でトルファン頭目の阿濟斯和卓は1720（康熙59）年に清軍がトルファンに進軍した際、ジューンガルに身を投じて最終的にウシュ〔ウチュ、ウシュ・トルファン〕に移住した（佐口透『18-19世紀東トルキスタン社会史研究』28-30, 59頁）。ホージャ・スィール・ベグ (Khawāja Sī Beg) とも表記される（ジャリロフ・アマンベクほか『『ターリーヒ・ラシーディー』テュルク語訳附編の研究』166頁および注367参照）。

ガルに対してフシュ・キフェク・ベグ (Hwuš Kifäk<sup>78</sup>) Beg) がハーキムであった<sup>79</sup>。

物語の章。聞かなければならない。

ユースフ・ホージャムは完璧な男で、能力と知識のある人であった。とても認識力が高く、博学で、大望と勇氣<sup>80</sup>をもつ人であった。好意ある助言者で、知性の分野で無比無類であり、勝利の従僕で、幸運の下僕であった。敵<sup>81</sup>に遭遇するたびに、彼の幸運は運命<sup>82</sup>のペンで不幸を敵の額に描いていたほどであった。あらゆる背教者は、この方に【p. 67 / fol. 34a】対立するならば、正しい言葉より他の言葉を思い出せないでいた。あらゆる悪い裏切り〔者〕は、この方に関して裏切り・欺瞞をなせば、自らの根本<sup>83</sup>の絆を切っていた。あらゆる方策がこの方か

78) D126 は KFK, Or. 5338, fol. 35b は KPK, Or. 9660, fol. 35b は KFK, Or. 9662, fol. 46a は KFK と綴る。Joseph Fletcher は Khwush Kipäk (Good Bran) と表記する (Joseph Fletcher, “The biography of Khwush Kipäk Beg (d. 1781) in the Wai-fan Meng-ku Hui-pu wang kung piao chuan,” *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, 36, Budapest, 1982, p. 168 (Joseph F. Fletcher, *Studies on Chinese and Islamic Inner Asia*, Great Britain: Variorum, 1995 に再録)。清朝史料の「和什克」または「霍什克伯克」は『タズキラ・イ・ホージャガン』に見える Khosh Kipek Bek [フシュ・キフェク・ベグ] に当たると解され、『欽定外藩蒙古回部王公表伝』巻 117, 輔国公和什克列伝によると、和什克はホタン人である (佐口透『18-19 世紀東トルキスタン社会史研究』58 頁)。

79) この段落の内容は諸写本間で微妙に異なるので、その原文を以下に示す。

D126: Ammā bu waqtlarda Yārkandgā ‘Awaz (*sic*) Beg, Ḥōtandīn Ġāzī Begnī ḥākīm qīlğan erdi. Ḥōtangā Ġāzī Begnī oġli ‘Umar Beg ḥākīm idi. Aqsūga ‘Abd al-Wahhāb Beg, Učga Ḥōja Sī Beg, Kāšqargā Hwuš Kifäk Beg ḥākīm idilār.

Or. 5338, fol. 35b: Ammā bu waqtlarda Yārkandgā ‘Awaḍ Beg, Ḥōtangā Ġāzī Begning oġli ‘Umar Beg ḥākīm idi. Aqsūga ‘Abd al-Wahhāb Beg, Učga Ḥwāja Sī Beg, Kāšqargā Hwuš Kipäk Beg ḥākīm idi.

Or. 9660, fol. 35b: Ammā bu waqtlarda Yārkanda (*sic*) ‘Awaz (*sic*) Beg ölüp, Ḥōtandīn Ġāzī Begnī ḥākīm qīlğan idilār. Ḥōtangā Ġāzī (*sic*) Begning oġli ‘Umar Beg ḥākīm idi. Aqsūga ‘Abd (*sic*) Wahhāb Beg ḥākīm idi. Učga Ḥwāja Sī Beg ḥākīm idi. Kāšqargā Hwuš Kifäk Beg ḥākīm idilār.

Or. 9662, fol. 46a: Ammā bu waqtlarda Yārkandgā Ḥawḍ (*sic*) Beg ḥākīm idi. Ḥawḍ ölüp, Ḥōtandīn Niyāz Begnī alıp kelip, ḥākīm qīlğan erdi. Ḥōtangā Ġāzī Begning oġli ‘Umar Beg, Aqsūga ‘Abd (*sic*) Wahhāf (*sic*) Beg, Ušga Ḥōja Sī Beg, Kāšqargā Hwuš Kifäk Beg ḥākīm idilār.

この Or. 9660 と Or. 9662 の原文からヤルカンドのハーキムであったアワズ・ベグが亡くなっていることが分かる。なお、Or. 9662 の原文ではニヤーズ・ベグをヤルカンドのハーキムにしたことになっているが、A グループ写本の Turk d. 20, fol. 75a ; D191, fol. 85b; Cf. ms. 3357, fol. 102b によると、ヤルカンドのハーキムはガーズイー・ベグで、ニヤーズ・ベグはイシク・アガである。

80) jur’at. D126; Or. 5338, fol. 35b は JR’T と綴るが、Or. 9660, fol. 36a; Or. 9662, fol. 46a の JR’T による。

81) dušman. D126; Or. 5338, fol. 35b; Or. 9660, fol. 36a; Or. 9662, fol. 46a は DVŠMN と綴る。

82) sar-nivišt. D126; Or. 9662, fol. 46a は SR Nvyš, Or. 5338, fol. 35b; Or. 9660, fol. 36a は SR Nvyšt と綴る。

83) bīh. D126 は SNBH と綴っているように見えるが、Or. 5338, fol. 35b; Or. 9662, fol. 46a による。

ら出されれば、神の運命づけにより、彼 [=この方?] のなかにあるものから彼 [=神?] に一致していた<sup>84)</sup>。それ故に事は生じていた<sup>85)</sup>。その夜昼の仕事[として]、神の称名称賛、クルアーンの朗読、貧民たちの状態に通暁すること、悪口や悪巧みをする者たちの卑劣な事を消すこと、国に安寧をもたらすこと、ムスタファーの聖法(シャリーア)を普及させることが、この方の習慣であった。すべての尊師(アズィーズ)の勝利幸運はこの方に依存していた。国の人々は皆、老いも若きも(ḥvurda kalān) この方に満悦していた。すべての人の心の動揺を、この方は取り除いていた。すべての敵を仲裁していた。敵たちが幾らかの考えで策略の罠をかけても、その方はそれより先に直観で気づき、策略を阻止してはねのけていた。その数年の策謀は無駄になっていた。若干の不正直な者たち(bad-diyānatlar)はカルマクたちの王(törä)に、ヤルグチ<sup>86)</sup>のカルマクたち(yargučī Qālmālar)に賄賂を与えることでムスリムたちに新奇な事をおこさせ、カルマクたちによくなるために奮闘していた。それ故にユースフ・ホージャム猊下はたいていイラにいて、この不正な者たち(nā-inšāflar)を数え上げて非難していた。ムスリムたちの上からカーフィル(不信仰者)たちの圧制迫害を可能な限り排除していた。

**[p. 68 / fol. 34b]** [ユースフ・ホージャムが] イラに行き来する理由は次のとおりであった。カーフィルたちの状況を見て好機を求めていた。つまり、「カーフィルたちに内部から不和が生じるであろう。我々はイスラームの剣を否応なく振るうであろう」と。そしてまた、王妃たち(ḥatunlar)<sup>87)</sup>やホージャたちの出身で、カルマクの手には捕らわれている者がいたが、「彼らを解放するために、私がイスラームをひろげれば<sup>88)</sup>」と。いつもそのような意図をもっていた。カルマクたちの多さには限度がなかった。騎馬の人が急いで行けば、こちらの辺境からあちらの辺境まで三か月<sup>89)</sup>で行っていた。正にこの[行程]数のなかにきっちりとカーフィルがいた<sup>90)</sup>。このカーフィルたちに対抗できる力は誰にもなかった。あるいは[そのようなことをすれば]自滅して果ててしまうであろう。

84) fīmā fih muttafaq ilayh kelür idi. 文意は明らかではない。

85) wuqū'ğa kelür idi. D126はVQVGHと綴るが、Or. 5338, fol. 36a; Or. 9660, fol. 36aによる。

86) ジューンガル政権の国事に参与する役職である「ザルグチ」のことである。ザルグチについては、小沼孝博『清と中央アジア草原——遊牧民の世界から帝国の辺境へ——』東京:東京大学出版会, 2014年, 41-42, 73頁参照。

87) Or. 9660, fol. 37a; Or. 9662, fol. 47a; Aグループの写本(Turk d. 20, fol. 64b; D191, fol. 73b; ms. 3358, fol. 84a)では、「ハーンたち」(ḥānlar)。

88) Islām ačsam. D126はIslām Islām ačsamと書くが、Or. 5338, fol. 36b; Or. 9660, fol. 37aによる。

89) Aグループの写本(Turk d. 20, fol. 64a; D191, fol. 73b; ms. 3358, fol. 84a)では「六か月」(altāy)。

90) Ušbu 'adad ičrä fīmā fih kāfir idi. fīmā fihを「きっちりと」と訳したが、仮の語釈である。

詩

カーフィルたちの民をはなはだ分裂させてイスラームの民を集め  
カーフィルの民が信仰の民に突入して、とても圧制をなしたときに

要するに、ユースフ・ホージャム猊下にも四人の息子がいた。その各々は、統治の区画の主査、気高さの庭園の初々しい若木、純正の国の吉兆の合の持ち主 (ṣāhib-qirān) [である]。

詩

その一人は勇敢さにおいてロスタム<sup>91)</sup>のようであった  
勇ましさを部門で世に唯一  
恵み深さとともに寛容が彼の常識  
臣民に公正の仕事  
美德において、その一人に比類する者なし  
アリストテレスとともにプラトンがその宰相  
なんとよき理解力、よき気質、よき認識力  
雄弁な者たちのあいだで、その理解力は速い  
**[p. 69 / fol. 35a]** その一人は信仰の時のクトブ (枢軸) である  
優美に満ちた、なんと上品な人  
ファリードゥーン<sup>92)</sup>の大望、ジャムシード<sup>93)</sup>の気質  
すべての眼は優雅さで満ちあふれる  
その一人は内気の宝庫で穏和の持ち主  
なんと気立てがよい、穏和な知識の探求者  
はなはだ清潔な気質、清らかな天性  
美しい善のあいだで太陽のかんばせ

[ユースフ・ホージャムの息子の] 一人はホージャ・アブド・アッラー・ホージャム (Ḥōja ‘Abd Allāh Ḥōjam), 二人目はホージャ・ムーミン・ホージャム (Ḥōja Mu’mīn Ḥōjam), 三人目はホージャ・クトブ・アッディーン・ホージャム (Ḥōja Quṭb al-Dīn Ḥōjam), 四人目はエルケ・ホージャ

---

91) イランの民族叙事詩『シャー・ナーメ』に登場する勇者。

92) 『シャー・ナーメ』における神話時代の第6代の王。

93) 『シャー・ナーメ』における神話時代の第4代の王。

ム (Ärkä Hōjam)<sup>94)</sup>。この皇子 (pādisāhzāda) たちの一部を〔統治の王座 (taht-i salṭanat) に坐らせ、一部を〕<sup>95)</sup> 同行させてイラに行っていた。

今回もイラに行き、カルマクたちの王 (törä) が替わっているのを見た。イラがかなり分裂して乱れている〔と見た〕<sup>96)</sup>。この方の心に数年来、望んでいた意図があった。〔実現する〕〔時が〕<sup>97)</sup> きていると〔思った〕。その秘密を誰にも語らなかった。すなわち、フシュ・キフェク・ベグがカシュガルに対してハーキムであった。とても明敏な策略の徒であり、仕事をよく知る人であった。しかし、勇気のなさや臆病な性質がまさっていた。それ故にユースフ・ホージャム・パーディシャーはこの相談を打ち明けた (arāga saldılar)。これをよく勘案してフシュ・キフェク・ベグをカシュガルに戻らせるために、カルマクたちに次のように得策を示した。すなわち、「クルグズたちが周辺で待ち伏せしている。彼らがカシュガルに危害を加えないようにせよ。城市〔の防備〕は空である」と。フシュ・キフェク・ベグをカシュガルに戻らせた。「そなたは行って、城市の壁の低い所を **[p. 70 / fol. 35b]** 高くし、壊れた所を修理し、武器甲冑を整えて戦いの準備をしているように。クルグズが手出しできないようにせよ」と言って退去の許可を与えた。

さて、フシュ・キフェク・ベグはカシュガルに来て、この任された仕事を実行し、城市の砦 (qal'alar) を整え、戦いの用具を整えていた。人々は皆、何事が起ったのかと驚いていた。おそらくフシュ・キフェク・ベグ自身も、秘訣が何であるのか分らなかった。

さて、ユースフ・ホージャム・パーディシャー殿下は、イラにいるクブチャク・クルグズたち (Qifčaq Qirgizlar) に秘かに次のように言った。「そなたたちの父祖たちは昔日から軍の総司令官 (sipah-sālār) となってきた。イスラームの剣を拒むことなく振るった。決してカーフィルに服属したことはない。特に我々の父祖たちに信念と誠実を捧げてきている。最も優れた信仰はガザート (聖戦) である。カーフィルたちの手中で死ねば、シャヒード (殉教者) である。殉教の階梯は最も高い。その地位はすべてを超えている。もし殺せば、ガーズイー (聖戦士)。ガーズイーたることは榮譽の証書である。もし略奪により財貨が手に入れば、母の乳よりも合法 (halāl) である。もしそなたたちに〔神の〕恩寵が助力となるならば、しかじかの時に来てイスラームに加勢するように」。ウマル・ミールザー (‘Umar Mirzā) という名の闘士 (böka)、クルグズの首領 (sardār) がいた。心底から同意して約束し、戦いについて考えた。ユースフ・**[p. 71 / fol. 36a]** ホージャム・パーディシャー殿下は非常に喜び、その大望と勇気が増した。

94) Or. 9660, fol. 37b; Or. 9662, fol. 47bによると、エルケ・ホージャムはホージャ・ブルハーン・アッディーン・ホージャム (Hwāja Burhān al-Dīn Hwājam) の別名である。

95) D126の欄外書き込み、Or. 5338, fol. 37a; Or. 9660, fol. 37b; Or. 9662, fol. 47b-48aによる補遺。

96) Or. 5338, fol. 37a; Or. 9660, fol. 37b; Or. 9662, fol. 48aによる補遺。

97) Or. 9662, fol. 48aにより waqt を補う。

しかし、理由なしでカシュガルに戻ることに、カーフィルたちは許可<sup>98)</sup>を与えないでいる。思案して手紙を書き、一人の家僕 (hādīm) に、「秘かに行って、我々の馬群 (īlqī) のところにて、慌てふためいて『私はカシュガルから来た』と言って、この手紙を私に渡せ」と言って送り出した。家僕は命令通りに数日後、急いで〔進み〕<sup>99)</sup>、この手紙を届けた。ユースフ・ホージャム猊下はこの手紙を王族カルマクのもとに持って行った。この手紙の話を説明した。手紙の内容は次の通りであった。「ホージャ・ムーミン、フシュ・キフェク・ベグをはじめカシュガルのベグたちの請願 ('arq) は次の通りである。四方八方にいるクルグズたちが同盟しており (ittifāq qīlīp durlar ki), 『我々は某日に四方からカシュガルに奇襲をかけて (čafāvul qoyup) 略奪し、埃を天空に舞いあげよう』と約束している<sup>100)</sup>。〔王が対処して〕<sup>101)</sup>我々小生たちに援助しなければ、我々は救われない<sup>102)</sup>。手紙おわる。〔平安あれ〕<sup>103)</sup>」。

この知らせをカルマクたちは聞き、呆然自失した。自分たちのあいだで相談したが、兵を派遣するための方策をなんも見出さなかった。なぜならば、自分たちの間に分裂離散の状況があったからである。仕方なく相談は、ユースフ・ホージャム猊下を戻らせることに定まった。即座にユースフ・ホージャムを呼び出させて、王は、「おお、ホージャムよ。そなたは完璧に賢く聡明な人である。〔そなたが〕<sup>104)</sup>知らないでいる我々の [p. 72 / fol. 36b] 秘密は何もない。我々の国土 (yurt) の中〔の状況〕はとても窮迫している。今、兵が行くのに方策はない。そなたがカシュガルに戻って行き、そなた自身のムスリムたちとともにクルグズたちに対峙するならば、〔多分そなたが行くことによりクルグズたちにも妨げとなろう〕<sup>105)</sup>」と命じた。ユースフ・ホージャム・パーディシャー猊下は心の中で〔神に〕深く感謝称賛をして、慰めのために、「おお、王よ、急ぐでない。心配するでない。私が行く必要はない。我々のバーバーク・アブド・

98) ruḥṣat. D126 は RVḤṢT と綴るが、Or. 5338, fol. 38a; Or. 9660, fol. 38b; Or. 9662, fol. 49a の RḤṢT が正しい。

99) Or. 5338, fol. 38a; Or. 9660, fol. 38b により yürüp を補う。

100) D126; Or. 9660, fol. 39a では BVLJAQ qīlīp durlar と記すが、Or. 5338, fol. 38b では「相談している (mašvarat qīlīp durlar)」、Or. 9662, fol. 49b では「約束している (va'da qīlīp durlar)」となっている。BVLJAQ (buljāq) には“a rendezvous, a station for troops”の語義がある (Robert Barkley Shaw, *A Sketch of the Turki Language as Spoken in Eastern Turkistan (Kāshghar and Yarkand)*, Part 2: Vocabulary, Turki-English, Culcutta, 1880, p. 52) けれども、後述の本書 [p. 81 / fol. 41a] に出てくる BVLJAQ qīlīp の用例も勘案して「約束している」と訳す。

101) törä 'ilājnī qīlīp. Or. 9660, fol. 39a; Cf. Or. 9662, fol. 49b による補足。

102) bī-'ilāj. D126 では 'ilāj の綴りが不確かである。Or. 5338, fol. 38b; Or. 9660, fol. 39a; Or. 9662, fol. 49b による。

103) Or. 5338, fol. 38b; Or. 9660, fol. 39a; Cf. Or. 9662, fol. 49b の wa al-salām による補足。

104) Or. 5338, fol. 38b; Or. 9660, fol. 39a の siz による補足。

105) bal-ki siz bargan birlä Qirg'izlar ham māni' bolur. Or. 9660, fol. 39a-b; Cf. Or. 9662, fol. 49b による補足。

アッラー (Bābāq ‘Abd Allāh) が行けば、充分である。もし充分でないならば、私が行けばよい」と言ってカーフィルたちに得策を示した。

この得策は王にとって理にかなった。ホージャ・アブド・アッラー・ホージャム猊下をカシュガルに戻らせることになった。〔ユースフ・ホージャムは〕密かに「おお、子よ。もし私が行けば、そなたをこのカーフィルはとらえておく。そなたが後から行くことは難しい。今そなたが行き、次々と人を送るように。『クルグズがおおいに襲撃しており、国土を略奪するだろう。我々の誰にもクルグズに対抗する力はない。我々は始末をつけることができない』という手紙を送れ。神が望むならば、まさにこのやり方で我々にカシュガルが得られるはずだ」と言って勧告を説明し、別れを告げて戻らせた。

ホージャム猊下〔ホージャ・アブド・アッラー〕は全速力で進み、アクスに降り立った。アクスの人びとはこの方の前に出て、城市に<sup>106)</sup>降り立たせた。数日アクスにいて、三千近くの<sup>107)</sup>兵を率い、ハームーシュ・[p. 73 / fol. 37a] ホージャムの馬群から五百<sup>108)</sup>の風のように走る馬を選別して、カシュガルに率いて行った。カシュガルに到った。カシュガルの人びとはこの方の前に出て敬意を表し、〔この方は〕統治の王座に確乎となった。〔ユースフ・ホージャムが〕託した言葉通りにその特別な家僕により (hāṣṣ ḥādīmlarīdīn) イラに手紙を送ったが<sup>109)</sup>、この手紙についてカシュガルの人びとは何も知らなかった。

この手紙がイラに届いた。ユースフ・ホージャム猊下はこの手紙を王のもとに持っていき、見せた。王の不安が増大した。〔王は〕ユースフ・ホージャム猊下に助けを求め、「そなたは即座にカシュガルに行くように。そなたが対処しなければ、ほかに対処はない」と言った。ユースフ・ホージャム猊下は王から退去の許可を得て、〔自分の〕大天幕 (otaglari) に来た。至高の

106) D126 では「アクスに (Aqsūga)」と記すが, Or. 5338, fol. 39a; Or. 9660, fol. 39b の šahrgā による。

107) A グループ写本の Turk d. 20, fol. 67b では「千に近い (miṅga yaqīn)」と記す。ただし, D191, fol. 77b; ms. 3358, fol. 89b では「三千に近い (üç miṅga yavuvraq)」となっている。

108) A グループ写本の Turk d. 20, fol. 67b では「四百 (tört yüz)」と記すが, D191, fol. 77b; ms. 3358, fol. 89b では「五百 (beş yüz)」となっている。

109) A グループ写本の D191, fol. 77b では「託した言葉通りに次々と、その特別な家僕のひとり、ヤルカンドのアーラム、アーホンド・ハージー・アブド・アッラーに手紙を書かせて送った (tapšurğan söz ṭarīqasī birlä pay dar pay ḥāṣṣ ḥādīmlarīdīn a‘lam-i Yārkaṅd Āḥvund Ḥājī ‘Abd Allāhğa kitābat fütütüp ravāna äylādīlār)」と記す (Cf. Turk d. 20, fol. 67b; ms. 3358, fol. 89b-90a)。なお、カシュガリアにおいてカーディー (裁判官) 長 (chief Qazi) はアーラム (a‘lam) の称号で知られるという (E. D. Ross, *Three Turki Manuscripts from Kashghar*, Lahor, n.d., p. 20, note 17)。また、清朝治下の東トルキスタンにおいて各地区の宗教支配層〔アーホンドたち〕の第一人者は裁判長官 (a‘lam ākhūnd) であり、その管轄下に司法官 (qāḍī ākhūnd) とムフティー (muftī) がいた (Joseph Fletcher, “Ch’ing Inner Asia c. 1800,” John K. Fairbank (ed.), *The Cambridge History of China*, vol. 10, part 1, Cambridge University Press, 1978, p. 79)。

神に感謝称賛をして支度を整えていた。荷を積んで出立した。速く進み、ムザト (Müzāt) <sup>110)</sup> を過ぎて一日進んだところでウチュ (Üč) のハーキム、ホージャ・スィー <sup>111)</sup>・ベグに出会った。この者はとても扇動的で疑い深い人物であった。しかし、彼には明敏さがあつた。初めて会つたときに、敬意の呼びかけをして <sup>112)</sup>「祝福されましよう。我が帝王、イスラームをひろげたお方よ」と言った。ユースフ・ホージャム猊下は心の中で「祝福というものは至高の神からあろう」と言った。[しかし]外面には表さなかつた <sup>113)</sup>。いくらか言葉をかわして、[ユースフ・ホージャムは]「今イラの中は分裂状態で、行くべき時機ではない。そなたは戻るほうがよい」と言った。しかし、この扇動的な者は「今、行って戻ろう」と言って **[p. 74 / fol. 37b]** 同意せず、別れを告げて立ち去つた。ユースフ・ホージャム猊下は、「この異端者 (rāfiḏī) <sup>114)</sup> は王のもとに行つて騒動を起こす」と言い、素早く <sup>115)</sup> 進んで、四日目にカシュガルに着いた <sup>116)</sup>。ファイザーバード (Fayḏ-ābād) <sup>117)</sup> から人を遣つていたので、国の人びと (ahl-i mamlakt) は知らせを得て出迎えた。[ユースフ・ホージャムは] ホージャ・アブド・アッラー・ホージャム <sup>118)</sup> に [迎えに出るためにカシュガルの] 王座を空にしないようにと言つた。ハーキムのフシュ・キフェク・

110) muzart (氷の峠) の r が脱落しており、イラとアクスの直通路上で天山を越えるムザルト峠 (Muzart-Pass) のことである (Martin Hartmann, “Ein Heiligenstaat im Islam: Das Ende der Caghataiden und die Herrschaft der Choğas in Kašgarien.” *Der Islamische Orient. Berichte und Forschungen*, Pts. 6-10, Berlin: Wolf Peiser Verlag, 1905, p. 234, footnote 2)。

111) D126 は ḤVSY と表記するが、Or. 5338, fol. 39b; Or. 9660, fol. 40a; Or. 9662, fol. 50b により Ḥvāja Sī とする。

112) taqṣīr alīp. taqṣīr については本書 **[p. 16 / fol. 8b]** 「日本語訳注 (1)」76 頁の注 89 参照。

113) D126; Or. 5338, fol. 39b では dāhiran iḏhār とのみ記すが、Or. 9660, fol. 40a の dāhiran iḏhār qīlmadīlar による。

114) ra:fizi (rāfiḏī) は、シーア派に対して侮蔑的な呼び名としてスンナ派によって使われる (Gunnar Jarring, *An Eastern Turki-English Dialect Dictionary*, p. 257)。

115) D126 では「素早く (čust čālāk)」の直前に JHT と綴っているが、J(Č)ST と書こうとして誤つたのであろう。

116) Or. 9660, fol. 40a-b は「ユースフ・ホージャム猊下は、この異端者のベグが王のもとに行つて騒動・暴動を起こさせたことを明敏に知つた。即座に自ら昼夜兼行して素早くアクスに行つた。アクスに一日いて、そこから進んで三昼夜休まず、四日目にカシュガルに着いた (Ḥaḏrat-i Yūsuf Ḥvājam farāsāt bilā bildīlar ki bu rāfiḏī (sic) beg törāniḡ qašīga barīp bir fitna fasād iṣni tüzātürdīlar. Dar ḥāl özlärini kečā kündüzlāp čust čālāk Aqsūga özlärini (sic) aldīlar. Aqsūda bir kün turup andīn yürüp üç kečā kündüz tīnmay törtünči künidā Kāšqarga yettīlar.)」と記す (Cf. Or. 9662, fol. 51a)。

117) ファイザーバードはカシュガル城市の東方およそ 67km に位置する町 (本書 **[p. 32 / fol. 16b]** 「日本語訳注 (2)」94 頁の注 23 参照)。

118) ユースフ・ホージャムの長男 (本書 **[p. 69 / fol. 35a]**)。

ベグをはじめ皆がダウラト・バグ (Davlat Bāg)<sup>119)</sup> に出向いた。幾人かはその後から引き続き出向いた。さて、ホージャ・アブド・アッラー・ホージャムは横門から出て、柱廊 (riwāq) の前で・・・<sup>120)</sup> において出会った。ホージャ・ユースフ・ホージャムは敬意 [を受けて]<sup>121)</sup> 城市に入った。

物語の章。聞かなければならない。

ホージャ・スィー<sup>122)</sup>・ベグはその日、ユースフ・ホージャム猊下をイラの道で見て、その様子によりカーフィルたちへの服従から脱していると疑い、即座に素早く進んで王のオルダ (宮廷) に行った。ダバチ (Dabāči)<sup>123)</sup> という王のもとに行って次のように申し上げた。「おお、我が王よ。そなたはユースフ・ホージャムを折悪しく戻らせている。彼は短い時機にそなたから顔を背ける。彼はその日に、ムザトの山 (Mūzāt tāgi) を越えている。そなたの国土 (ユルト) の中に不穏がある。このような時に、あのような相談に値する (kangāšlik) 人物がそなたのもとにいるのは良かった。今や[いなくなって]まったく役に立たない<sup>124)</sup>。今、速やかに人が行き、**[p. 75 / fol. 38a]** 追いついて連れ戻すならばよい。さもなければ、ヤルカンド、カシュガルから望みを絶たねばならない」と不平を言った。整治するカーフィルたち (ahl-i tadbīr kāfīrlar) はユースフ・ホージャムを戻らせたことを道理にかなっていると見なさなかった。王を後悔させた。一人のカーフィルがいた。完全に勇敢で、ダンジン・ジャイサン (Dānjīn Jaysan)<sup>125)</sup> と呼ばれていた。三百の者たちとともに、「おまえは速く進んで追いつき、戻らせるように。

119) アリー・アルスラン・ハンのマザールがあるカシュガル市東部の地区。澤田稔「オルダム・パーディシャー聖域について」『内陸アジア史研究』第14号、1999年、100頁 (Sawada Minoru, “The System of Ordām-Padishāh (The Oasis of Yangi Hisar),” *Journal of the History of Sufism*, vol. 3 (2001-2002), p. 101) 参照。Aurel Stein, *Innermost Asia*, vol. 4, Maps, Oxford: Clarendon Press, 1928, Serial No. 5の地図に記載されている。

120) ŠBRと綴られているが、読みと意味を解し得ない。

121) D126では i‘zāz ikrām (敬意) とのみ記すが、Or. 5338, fol. 40a; Or. 9660, fol. 40b の i‘zāz ikrām birlān / birlā による。

122) D126は ḤVSY と綴るが、Or. 9660, fol. 40b; Or. 9662, fol. 51b の ḤVAJH SY により Ḥvāja Sī と読む。

123) ジューンガル (カルマク) の君主ダワチ (在位 1753-55年)。D126は DBAJY, Or. 5338, fol. 40a は DABAJY, Or. 9660, fol. 40b は DBANJY と綴る。Or. 9662, fol. 51b はガルダン・チェリンと記す。

124) hič sūdī yoq. D126に yoq は記されておらず、Or. 5338, fol. 40a; cf. Or. 9660, fol. 41a により補う。

125) D126; cf. Or. 5338, fol. 40b; Or. 9660, fol. 41a では DANJYN JYSNG, Or. 9662, fol. 51b では DANJVN JYSNG と綴る。なお、Aグループ写本の当該箇所 (Turk d. 20, fol. 68b; D191, fol. 78b; ms. 3358, fol. 91b) には、この人名は挙げられていない。ジャイサン (ザイサン) は、ジューンガルの集団 (オトグ) を率いる遊牧領主の称号であり、君主のもとで政務に参与する者もいた。詳しくは、小沼孝博『清と中央アジア草原』40-45頁参照。

もし同意しないならば、力づくで連れてくるように」と命じて出発させた。それから、このカーフィルは速く進んだが、追いつけなかった。なぜならば、この方を至高の神がカーフィルたちの捕囚から解放していたからである。このカーフィルがファイザーバードに近づいた時、マシド (Masjid) という宿場 (manzil) からユースフ・ホージャムは〔さらに〕進んでキメ (Kimä)<sup>126)</sup>を過ぎていた。このカーフィルは仕方なく、絶望して<sup>127)</sup>後ろに戻った。〔このカーフィルは〕アクスに行き、アブド・ワッハブ・ベグ (‘Abd Wahhāb Beg)<sup>128)</sup>と会って結束し (sözni bir qılıp), 「おお、ユースフ・ホージャムよ。そなたを王 (törä) が招いている。アムルサナー (‘Amürsanā) が大軍とともに来るらしい。彼が来るまでにより早く、そなたはイラに着いているように。〔王に〕援助<sup>129)</sup>しておく時機はまさに今である。もし、そなたがこの言葉を受け入れないならば、そなたは生命に気をつけて戦いの用意をしておくように」と人を遣った。この人は手紙を持ってカシュガルに行った。ユースフ・ホージャムにこの手紙〔の内容〕を説明した。ユースフ・ホージャムは「私の足に関節の病気がある」と返事した。「私は健康を回復したら行く」と、道理になかった言葉 **[p. 76 / fol. 38b]** により〔この人を〕出発させた。この人はアクスに来て、この返事を述べた。アブド・ワッハブ・ベグの策略は役に立たなかった。望みを失って、ダンジン・ジャイサンはイラに戻った。

さて、ユースフ・ホージャムは至高の神に感謝称賛して聖法 (シャリーア) の命令にそって行動し、臣民<sup>130)</sup>や貧民の司法と審判を聖法の命令で治め、イスラームの勝利に心をくばって兵器を準備し、軍の大太鼓<sup>131)</sup>を整えて城壁と稜堡<sup>132)</sup>を強化し、武器の用意をして常に戦時の日々のようにしていた。幾らかの人々は心配し、心に震えが生じていた。幾らかの者はイスラームが勝利することに喜び、戦いに備えていた。

126) 綴りは KMH。ファイザーバードの西方約 18km に位置する村。Aurel Stein, *Innermost Asia*, vol. 4, Maps, Serial No. 5 の地図では Kima と表記するが、『中華人民共和国新疆维吾尔自治区地図集』ウイグル語版、1966 年、138-139 頁の地図の表記に従う。

127) D126; Or. 5338, fol. 40b は M‘YVS と綴るが、Or. 9660, fol. 41a の MA‘YVS により ma‘yūs と読む。

128) アクスのハーキムであるアブド・アルワッハブ・ベグ (‘Abd al-Wahhāb Beg) (本書 **[p. 66 / fol. 33b]** 参照) であろう。

129) D126 は BARVRLYK と綴るが、Or. 5338, fol. 40b の yārī-sāzliq, Or. 9660, fol. 41a の yār yārvarlik, Or. 9662, fol. 52a の yārvarlik による。

130) D126; Or. 9660, fol. 41b は R‘AYH (ri‘āya), Or. 5338, fol. 40b は R‘AYT (ri‘āyat) と記すが、Or. 9662, fol. 52a の R‘YH (ra‘īya) による。

131) D126; Or. 9662, fol. 52b では KM KAS, Or. 9660, fol. 41b では KAM KVS, Or. 5338, fol. 41a では KM KVS と綴られている。kās, kūš は「大太鼓」の意味であるが、KM / KAM の読みと意味は不明である。

132) safīl vā sar-kūflarī. D126 は safīl を SĠYL と誤記しているが、Or. 9660, fol. 41b の SFYL による。sar-kūf は “citadel” の意味がある sar-kūb の訛りとみなす。

物語の章。イラについて聞かなければならない。

イラが分裂状態にある理由は次の通りであった。ガルダン・チェリン (Galdan Čerīn) が死んで、その王座に息子のアジャン (Ajan) が坐った時、その年齢は十二であった<sup>133)</sup>。年少であることがカーフィルたちの噂になっており、[アジャンは] 常に犬遊び・闘羊・闘鶏、カルマクの婦人 (ḡatun) たちをカルマクに切りつけさせること、[常にこのような]<sup>134)</sup> 悪い行為をし続け、国事 (yurt işi) は統率されなくなっていた<sup>135)</sup>。彼にはグラーム・ビヤール (Ġulam Biyā)<sup>136)</sup> という姉 (egāči) がいた。彼女はネメク・ジルガル (Nemākū Jirġāl)<sup>137)</sup> というカルマクと **[p. 77 / fol. 39a]** 会ってくつつこうとし、アジャンを捕えてネメク・ジルガルを王 (tōrā) にしようとした時に、身内から (öz içidin) アジャンに人が知らせた。グラーム・ビヤールを、ネメク・ジルガルをアジャンは捕えて針で眼をつぶし、獄に入れさせた。ガルダン・チェリンには側室 (ġuma ḡatun) からラマ・タージー (Lāmā Tājī)<sup>138)</sup> という、もう一人の息子がいた。かれはチャガン・ス (Čaġān Sū)<sup>139)</sup> という夏营地 (yaylaq) において一集団のカルマクの首領 (sardār) であった。[アジャンが] グラーム・ビヤールを捕らえたことを聞いて、彼が大軍とともに来着した際に、

133) ガルダンツェリン [ガルダン・チェリン、在位 1727-45 年] は 1745 年に死去し、その遺言により次子のツェワン・ドルジ・ナムジャルが 13 歳で即位し、アジャン・ハンと号した (若松寛「ジュンガル汗位継承の一経緯——ツェワン・ドルジ・ナムジャルからダワチまで——」田村博士退官記念事業会編『田村博士頌寿東洋史論叢』京都：田村博士退官記念事業会、1968 年、648-651 頁)。

134) Or. 9660, fol. 42a; Or. 9662, fol. 52b の hamīša ušbu qatarliq による補遺。

135) 若松寛氏が引用するパラス (P. S. Pallas) によると、「かれはお気に入りの若い貴族たちと放蕩に耽ったり、犬や家畜を娯楽のために射殺するのをつねとしたり、ましてヤザルガ Sarga (< jarya) (ハン会議-原注) を決定する年老いた評議員たちを軽んじ、そしてとくに僧侶社会に好かれなかった」という (「ジュンガル汗位継承の一経緯」652 頁)。

136) D126; Or. 5338, fol. 41b; Or. 9660, fol. 42a は ĠLAM BYA, Or. 9662, fol. 52b は ĠVLAM BYA と綴る。ただし、D126, p. 77 / fol. 39a では ĠVLAM BYA とも綴る。グラーム・ビヤールは清朝史料の伝えるオラン・パヤル (鄂蘭巴雅爾) に当たろう (若松寛「ジュンガル汗位継承の一経緯」654 頁参照)。

137) D126; Or. 5338, fol. 41b; Or. 9660, fol. 42a では NMKV JRĠAL, Or. 9662, fol. 52b では NMKV JYRĠAL と綴られている。ただし、D126, p. 77 / fol. 39a では NMKV ČRĠAL とも綴る。小沼孝博氏はチョロス部タイジのネメク・ジルガルに同定する (『清と中央アジア草原』45-46 頁、注 63, 34 頁、46 頁参照)。

138) ガルダンツェリンの長子 (ただし庶子) ラマ・ダルジャを指している。若松寛「ジュンガル汗位継承の一経緯」648-651 頁参照。

139) D126; Or. 9660, fol. 42a; Or. 9662, fol. 53a では JFAN と綴られているが、モンゴル語の čayan (「白い」) の意味と解し、JĠAN の誤記とみなす。なお、ダワチの采邑であった察罕呼濟爾 Čayan qujir は、だいたい今日のタルバガタイの南、ウリヤスタイ河の上流付近に相当するという (若松寛「ジュンガル汗位継承の一経緯」657 頁)。su はテュルク語で“water, river”, qujir はモンゴル語で“salt marsh”の意味があるので、Čaġān Sū と Čayan qujir は同一地を指すのかもしれない。

アジャンは知らせを得て恐れ逃げ去った。ラマ・タージーが背後より追って捕らえ、自ら王座にのぼり王となって坐り、アジャンの眼を針でつぶし、クチャー (Kūčār)<sup>140)</sup> に追い出した<sup>141)</sup>。アジャンはクチャーで死んだ。しばらくしてエミル (‘Emīl)<sup>142)</sup>、アルトゥシュ (Artūš)<sup>143)</sup> から、アムルサナー、ダバチという者もガルダン・チェリンの姉妹の子 (hamšīra-zāda) であり<sup>144)</sup>、彼らにも王位の血縁関係 (törālik nisbat) があつたが、彼らはアジャンが死んだことを聞き、「王位は我々にとどく」と言つて兵を集めて来て、ラマ・タージーには知らせがないままであつたが、ラマ・タージーの宿営 (uruğ)<sup>145)</sup> を包圍して下馬した。ラマ・タージーはどの方向にも出られなかつた。アムルサナーの兵が鉄砲をうって (mīlṭīqlap), ラマ・タージーを天幕 (aq öy) のなかで殺した。人々を捕虜にして略奪し、ダバチが王 (törä) になって坐した<sup>146)</sup>。アムルサナーは「私が王になる」と言つてダバチと闘い、結局、アムルサナーはなれないで逃げ、五百<sup>147)</sup> のカルマクとともに中国 (Haṭāy) に出て行つた。北京 (Bejīn)<sup>148)</sup> へ行き、ハーンに兵を求め

140) D126; Or. 9660, fol. 42a; Or. 9662, fol. 53a では KVJAR, Or. 5338, fol. 41b では KVČA と綴られている。タリム盆地北辺の都市クチャ (Kucha) は Kuchar とも表記される (Gunnar Jarring, *Central Asian Turkic Place-Names – Lop Nor and Tarim Area* (The Sino-Swedish Expedition, Publication 56, VIII. Ethnography, 11), Stockholm: The Sven Hedin Foundation, 1997, p. 267 参照)。ショー氏の英訳の脚注では「彼を通り (streets) に追いやり、彼はそこで死んだ」と訳されている (Robert Barkley Shaw, “The History of the *Khōjas* of Eastern-Turkistān summarised from the *Tazkira-i-Kh̄wājagān* of Muḥammad Šādiq Kashghari,” edited with introduction and notes by N. Elias, Supplement to the *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, Vol. 66, Part 1, 1897, p. 49, footnote 38)。これは KVČA の綴りを köčä (street) と読んだのであろう。なお、『平定準噶爾方略』前編、卷 52、乾隆 15 年 9 月辛酉の条によると、ツェワン・ドルジ・ナムジャル [アジャン] はアクスに監禁された (若松寛「ジュンガル汗位継承の一経緯」655-656 頁参照)。

141) ミューラー (G. F. Müller) によると、アジャン・ハンは 1750 年夏、ラマ・ダルジャを殺そうとして、かえって失敗し、盲目にされ追放されたといひ、ワリハーノフ (Ch. Ch. Valikhanov) によると、ラマ・ダルジャは 1750 年 5 月 24 日に弟を盲目にしてホンタイジになり、同年 10 月 12 日にラマ・エルデニ・バートル・ホンタイジの名を受けたといひ (若松寛「ジュンガル汗位継承の一経緯」655-656, 657 頁)。

142) 綴りは ‘MYL。タルバガタイのエミル河を指していよう。

143) D126 は ARTVŠ, Or. 5338, fol. 41b; Or. 9660, fol. 42a は ĀRTVŠ, Or. 9662, fol. 53a は ARNVŠ と綴る。イルティシュ河を指しているのではないだろうか。

144) ホイト部長アムルサナーはガルダンツェリンの姉妹ボトロクの子であるが、ジュンガル部長ツェワンラプタンの従兄弟の孫であるダワチ [ダバチ] の母については確認できていない (宮脇淳子『最後の遊牧帝国』東京：講談社、1995 年、165 頁と 227 頁の系図および 227-229 頁参照)。

145) D126 は AVRTVĠ, Or. 9662, fol. 53a は AVRĠ と綴るが、Or. 9660, fol. 42b の AVRVG による。Or. 5338, fol. 42a は AVTAG と綴るが、otağ (大天幕) と読めるので、意味は通じる。

146) ダワチとアムルサナーらは 1752 年 11 月 27 日、イリにおいてラマ・ダルジャを殺害し、ダワチが汗位についた (若松寛「ジュンガル汗位継承の一経緯」663 頁)。

147) Or. 9662, fol. 53b は「五」とするが誤記であろう。

148) D126; Or. 9662, fol. 53b は BRJYN と綴るが、Or. 5338, fol. 42a; Or. 9660, fol. 42b の BJYN による。

た<sup>149)</sup>。【p. 78 / fol. 39b】ハーンはアムルサナーによき恩寵をもって客もてなしをして、千の兵とともにサルン・ジャン・ジュン (Sārūn Jān Jūn<sup>150)</sup> <sup>151)</sup>を付け<sup>152)</sup>与えた。彼らは来る途上にある。

さて、ダバチはアムルサナーの恐れから免れないでいた。それ故にカシュガルの敵<sup>153)</sup>に兵を送らなかつた。ユースフ・ホージャムを送る動機はそこにあった。

さて、ユースフ・ホージャムを〔イラに〕戻らせて来るために行つたカルマクが戻つて来て、ダバチに出来事を説明した。カルマクたちは自分たちの間で次のようなことを考えた。すなわち、時機が微妙<sup>154)</sup>で、兵が行くのに方策はない。アムルサナー〔と〕の戦いに兵を集めるといふ考えになっていた。

〔以下、日本語訳注 (4) に続く〕

---

149) 乾隆 19 (1754) 年 7 月、アムルサナーは五千の兵、婦女子、その他あわせて二万人を率いて清朝に降つたという (『清高宗実録』卷 469, 乾隆 19 年 7 月丁酉, 7 月庚子の条) (森川哲雄『『四オイラト史記』に見られるアムルサナーの事蹟』森三樹三郎博士頌寿記念事業会編『森三樹三郎博士頌寿記念東洋学論集』京都: 朋友書店, 1979 年, 876-879, 885 頁, 小沼孝博『清と中央アジア草原』48 頁参照)。

150) D126 は JVLANK と綴るが, Or. 5338, fol. 42a; Or. 9660, fol. 42b; Or. 9662, fol. 53b の JVNK による。

151) Sārūn は左領 (zuo-ling) を写したものか、あるいは人名であろうか。Jān Jūn は將軍 (jiang-jun) の写しであろう (Robert Barkley Shaw, “The History of the Khōjas of Eastern-Turkistān summarised from the Tazkira-i-Khwājagān of Muḥammad Šādiq Kashghari,” p. 49, footnote 38 参照)。

152) D126 は QARŠYB と綴るが, Or. 5338, fol. 42a; Or. 9660, fol. 42b; Or. 9662, fol. 53b の QATYB (qatīp) による。

153) yaġī (YĠY)。Or. 5338, fol. 42a は YĠMA (yaġma, 略奪), Or. 9660, fol. 42b は ḤMAYT (ḥimāyat, 保護) と記す。

154) nāzuk。D126; Or. 5338, fol. 42a; Or. 9660, fol. 42b; Or. 9662, fol. 53b は NAZVK と綴る。

